

カズオ・イシグロの *The Unconsoled* に あらわれる「誤解」と「切断」の考察*

武 富 利 亜

1. はじめに

日本で生まれ、イギリスで育つというカズオ・イシグロ (1954-) の稀有な生い立ちに着目し、日本とイギリスの両義的な側面に焦点をあて、小説の登場人物にみられる「アイデンティティ」の問題などに着目した議論はこれまでも国内外で行われてきた。また、イシグロ小説の主人公の多くは、一人称で過去の記憶を語っており、日本や英国を舞台にした作品は特に、「祖国喪失」や「郷愁」と結びつけて論じられることが多かった。しかし、イシグロの四作目の長編である『充たされざる者』(*The Unconsoled*) (1995)¹ は、架空都市が舞台であり、夢の中で物語が展開しているように描かれている点で、イシグロ作品にはなかった新たな試みが見受けられる。また、『充たされざる者』の登場人物の間に生じる「誤解」や登場人物の身体「切断」などに焦点をあてた論文は、今のところ確認できていないことから、新しい視点として議論の余地は十分にあると思われる。

これまで多くの研究者は、“Ishiguro combines the fantastic realism of a dream narrative with the staginess of a theatrical farce. [...] Every encounter is Ryder encountering ego projections of himself,”² や、“They are simply the manifest symptoms of a latent anxiety. [...] Each of the musicians of the town—Stephan, Hoffman, Christoff and Brodsky—represents displaced ver-

* 本稿の内容及び書式について、数多くの有益なコメントをいただき、その内容についてご議論頂いた本学会の匿名の査読委員お二人及び編集委員長の野村忠央氏に、記して謝意を表す。言うを俟たず、残る不備・遺漏は筆者一人に帰せられるべきものである。

sions of Ryder as he has been in the past or as he may be in the future.”³などのように、『充たされざる者』は、非現実的な夢の領域と笑劇を合わせたような舞台設定の中で、登場人物達は、ライダー（Ryder）が過去に出会った人物、あるいは、ライダー自身におきた過去の出来事や将来に対する不安を体現するライダーの分身であると論じられてきた。イシグロもインタビューで、“[T]his is a biography of a person, but instead of using memory and flashback, you have him wandering about in this dream world where he bumps into earlier, or later, versions of himself.” (Jaggy 114)、あるいは、“I wanted to have someone just turn up in some landscape where he would meet people who are not literally parts of himself but are echoes of his past, harbingers of his future and projections of his fears about what he might become.” (Steinberg 105-06) などと述べており、これまでの議論を支持する見解を示している。従って現在では、『充たされざる者』は、ライダーがつくり出した架空世界の中で、ボリス（Boris）や幼少期のゾフィ（Sophie）はライダーの子ども時代、シュテファン（Stephan）はライダーの青年期、ブロツキー（Brodsky）はライダーの未来の不安を具現化しているという見方が通例となっている。本稿においても通例の解釈を念頭に議論を進める。さらに、本稿においては、小説のなかでイシグロが登場人物にたびたび言わせている“misunderstanding”⁴という語に着目し、その語に包含された意味を考える。その中でも特に、ライダーの過去を理解するうえで関わり合いがあると思われる、グスタフ（Gustav）とゾフィ、ホフマン（Hoffman）夫妻とシュテファン親子の「誤解」に焦点をあてたい。また、これまであまり論点としてとりあげられなかった、ブロツキーの左足の「切断」⁵にも焦点をあてる。というのも、親子の間に生じる「誤解」とブロツキーの左足の「切断」は、ライダーの内面心理を解き明かす鍵となると考えるからである。親子の間で生じる「誤解」や繰り返される左足の「切断」の意味を考察し、ライダーの真意を明らかにしたい。

2. 「誤解」

『充たされざる者』は、世界的なピアニストであるライダーが、ある欧州の街を「木曜の夕べ」と称するリサイタルに招待される形で訪れるところ

からはじまる。ライダーは、「木曜の夕べ」のリサイタルが開催されるまでの間に様々な人々に会おう。そして、ライダーは、街の人々から家庭内の不和やコミュニティの抱える問題などを打ち明けられ、それを解決してほしいと依頼されるのである。しかし、次から次へと持ち掛けられる相談やライダー自身の家庭内の問題に振り回され、結局、なに一つ解決することはない。最終的にライダーは、リサイタルで演奏することも、人々の悩みを解決することもなく、次の街へと旅立つ。

Gary Adelmanは、『充たされざる者』を、“Mr. Ryder’s Comedy Company of the Psyche.” (167) と称している。エイデルマンが『充たされざる者』を「ライダーの精神世界喜劇団」と称したのは、おそらく、物語が通常では考えられない展開になったり、登場人物がわざとらしい芝居がかった発言をしたり、思い込みをしたりすることを踏まえていると思われ、正鵠を得ているといえるだろう。グスタフとゾフィ親子が不仲になった原因は、現実ではあまり考えられないような父親のとった行動がきっかけで生じる「誤解」であった。やがて、その「誤解」は互いにその話題に触れない、あるいは、互いに口をきかないなどといった「暗黙の了解」へと変貌していくのである。グスタフは、自らの命が消失する前にゾフィとの和解をはかろうと試みるが、その願いは叶わぬまま息を引き取ることになる。

グスタフは、ゾフィとの間に「誤解」が生じた当時のことを振り返り、次のように語る。「彼女が幼い時は、私たちはとても仲が良かったのです。私たちの間にある了解は、彼女が八才になったばかりのころにはじまりました。ええ、あのとき彼女は、そのくらいの年齢でした。因みに、ライダー様、私たちの間にあるこの了解ですが、こんなに長引くことになろうとは、元々想像もしていませんでした」(82) グスタフがここでいう「了解」とは、互いに直接会話をしないという「暗黙の了解」を指している。仲が良かった親子が仲たがいをするきっかけとなったのは、些細なことであった。ある日、仕事を終えたグスタフが妻のために台所の棚を修理していると、ゾフィがグスタフにかまって欲しい様子でつきまとう。そんなゾフィに対し、グスタフは無言を貫くことを決意する。「私は沈黙を守りました。完全な沈黙です。ほどなくして彼女は、困惑してむくれてしまいました。もちろん、私もそれを分かっていました。しかし、沈黙を貫くと決めたわけですから、私は、貫き通しました」(81)。その後三日間、グスタフはゾフィ

と全く口をきかない。その結果、娘はグスタフに悪態をつくようになる。ゾフィのとった行動は、父親の注意を引き、声をかけてもらいたいという子どもの欲求の裏返しであった。しかし、グスタフは頑なに無言を貫いてしまう。グスタフがなぜ娘に声をかけなかったのかについては、一切語られていない。そして、ゾフィが十一才のときに二人の関係を決定的に修復不可能にする事件が起きる。

ゾフィは、ユーリッヒ (Ulrich) というハムスターを飼っていた。ゾフィは、そのハムスターを箱に入れたままどこかへ置き忘れてしまう。いなくなったハムスターに気づいたゾフィは、両親と共に探し始める。しかし、妻が外出すると、グスタフは自分の部屋へ入り、ラジオのボリュームを上げて閉じこもる。ゾフィがハムスターの亡骸を発見し、むせび泣く声が聞こえる。それでもグスタフは、ゾフィに声をかけない。グスタフは、ゾフィが声をかけてくれば、ドアの外へ出ようと決心するが、ゾフィがなにも言わないので行動を起こさないのである。妻が帰宅し、ゾフィが泣いている理由をグスタフに訊ねると、グスタフはラジオを聞いていて気づかなかったと釈明をする。しかし、ゾフィはグスタフが、自分が泣いていたことに気づいていたことを知っていたのである。グスタフとゾフィは、互いを嫌っているわけではない。グスタフもゾフィも、相手が歩み寄ることを期待したが、それが叶わなかったのである。つまり、二人とも仲直りの「機会」を逸してしまったのだ。その後、グスタフが病に倒れて死の床にあっても、二人は親子であるにもかかわらず、まともに会話を交わすことはない。臨終の床で少し言葉を交わすが、互いに別の話をするなど、最後まで二人の会話がまともに成立することはないのである。

『充たされざる者』に登場する別の親子の間でも、ある「誤解」が端緒となり関係がこじれている。それは、ホテルのマネージャーをしているホフマン (Hoffman) とその妻クリスティン (Christine)、そして息子のシュテファンである。ホフマン夫妻とシュテファンの間には、シュテファンのピアニストとしての才能の有無をめぐる「誤解」が生じる。

シュテファンは、ピアニストとしての自分の技量に自信が持てない。それをライダーに対して打ち明ける場面がある。シュテファンは、四才の頃からピアノを習いはじめたという。当時の両親の仲は良好で、特に母親はシュテファンの教育に熱心であったことが語られる。しかし、シュテファ

ンが九才の頃に母親がピアノ教師と衝突し、シュテファンはピアノの稽古を止めることになる。ピアノの稽古を止めた十才から十二才の二年間のことをシュテファンは、次のように振り返る。「私は、十歳から十二歳の間の非常に重要な二年間を失ったのです。(中略)私の両親は、その二年間がどれほどの損失をもたらすかなど考えたこともないでしょう」(74)。またシュテファンは、自分がピアノの稽古を止めたせいで両親は口をきかなくなっていたと思っている (“[T]his change must have dated back to when I’d lost Mrs Tilkowski[Stephan’s piano teacher].”) (73)。しかし、シュテファンは、二人が何故口をきかないのか、その真意を訊ねることはしていない。それどころかシュテファンは、ピアノを止めた自分を責め、両親を仲直りさせるために再びピアノの稽古をはじめるのである。

ピアノの稽古を再開したシュテファンの上達が著しいことから、ホフマン夫妻はシュテファンが十七才のときに、ピアノのコンクールにエントリーする。そこでシュテファンのピアノの演奏を初めから終わりまで聴いたホフマン夫妻は、絶望してしまう⁶。特に母親のクリスティンは失望し、これまでシュテファンにしてきたことを“big waste” (75) だと考え、外出もしなくなってしまう。シュテファンも自分の演奏を聴いた両親の反応をみて、自分には才能がないと思いつむのである。その後両親は、シュテファンのピアノ演奏をまともに聴こうとはしなくなる。ライダーはホフマンに対し、シュテファンには才能があると反論する (“Mr Hoffman, Stephan is a very gifted young man …”) (354) が、ホフマンは全く聞く耳を持たない。「木曜の夕べ」でライダーの前座としてピアノ演奏を披露したシュテファンは、観客から拍手喝さいを浴びる。このとき両親は、一度は会場に足を運んだものの、シュテファンの演奏が始まる前に会場を去っており、結局演奏を聴いていないのである。つまり、ホフマン夫妻の、シュテファンにはピアノの才能がないという「誤解」は、解かれることはなかったのである。

Carlos Villar Flor は、“[H]e [Ryder] like Stephan, or Boris, must have been severely hurt in his childhood by being a witness of constant parental fighting and by suffering a subsequent neglect.” (166) とライダーは、シュテファンやボリス同様、常に両親が喧嘩をしているのを目撃し、まともに面倒をみてもらえなかった幼少期に深く傷ついたに違いないと述べている。この

“subsequent neglect”には、親が子どもの才能を認めようとし、あるいは、子どもが才能を認めてもらいたいとサインを送っていることに気づかない、親の看過も含まれるだろう。グスタフとゾフィ、そしてホフマン夫妻とシュテファンのそれぞれの「誤解」を考察すると、二組の「誤解」に共通するのは、互いがその「誤解」を抱くまでの過程において、十分な会話をもたないことがあげられる。また、その「誤解」を解く努力をすることで、ところまで至らないということもあげられるだろう。そして、その「誤解」はやがて、各々の精神を支配し、その話題には触れないという「暗黙の了解」へと変わっている。こじれた関係は修復されることはなく、トラウマとなって残り、その後、様々な支障をきたしている。例えば、ゾフィは、父親が死の床にあってもまともに会話をする事さえできていない。シュテファンは、両親にピアノの実力を認めさせることができないまま「木曜の夕べ」を終えている。

3. 「切断」

ライダーがこの街を訪れた最大の理由は、「木曜の夕べ」というリサイタルでスピーチをし、ピアノの演奏をすることである。そして、個人的には、ライダーの内縁の妻であるゾフィとゾフィの連れ子のボリスに久しぶりに面会することである。しかし、ライダーは、ゾフィのことを “[S]he was somewhat more than attractive than I had expected.” (32) と言い、まるで忘れていたかのような発言をするなど、あまり愛情がない様子で語る。またゾフィは、ボリスに対して、ライダーのことを “He’s a special friend.” (32) と紹介しており、家族としての絆はあまり深くないことが示される。ライダーは、ピアニストとして旅を続けているため、家を空けることが多い。そのため、家族の象徴ともいえる「家」とは、縁が薄いと思われる。そのようなライダーのことを Ching-chih Wang は、次のように述べている。“The house, a symbol for settlement, familial affiliation and community connection, is never found. An orphan like Ryder, who gets lost in the maze of the traumatic past, is destined to wander around.” (102) ワンは、家族や地域とつながりのないライダーを孤児のようだとし、「過去のトラウマの迷路に迷い込み、あてもなく彷徨い続けることを運命づけられている」とみているのが分かる。

ライダーは、世界を巡ることを止められない理由をボリスに次のように語る。

私はこの旅を止めるわけにはいかないんだ。分かるかい？それがいつ巡ってくるか分からないのだから。(中略) いいかい、一度、その機会を失えば、もう取り返しがつかない。遅すぎるんだよ。その後、どんなに一生懸命に旅を続けても、もう遅すぎる。今まで私が費やしてきたこの年月のすべてが無意味になってしまうのだから (218)。

ライダーがいう「遅すぎる」は、なにに対して遅すぎるのか、具体的には語られない。しかし、なにかの「機会」を逸するかもしれないという強迫観念のようなものに突き動かされているのは明らかである。ゾフィはそんなライダーに対し、息子のボリスとの時間を大切にしてほしいと次のように懇願する。「今、あの子は子ども時代を過ごしているのよ。でも、刻々と過ぎていっている。すぐに大人になってしまうわ。子ども時代がどんなものだったか知らないままに」(250)。ライダーは、子ども時代がどんなに子どもにとって大切か、自分自身の経験から熟知しているにも拘らず、仕事にしか目が向かない。なぜ、ライダーは家庭よりも仕事を優先するのか、逸することを恐れる「機会」とはいったい何なのだろうか。それを紐解く鍵として、ライダーの過去と未来に焦点をあててみたい。

ライダーは度々、子ども時代に両親が不仲であったことを回想している。ライダーの子ども時代を象徴するものの一つにあげられるのが、ゾフィとボリスと出かけたときに偶然に見つけた、ライダーの家族の車だろう。車は、長いこと放置されたままになっており、クモの巣だらけになっている。ライダーは、その車を見て、次のように述べる。「わたしが立っているそばの草むらに長いこと放置された、壊れた古い車を見つけた。(中略) わたしが眺めているのは、父が何年も乗りまわしていたファミリー・カーであることに気が付いた」(260-61)。そしてライダーは、昔、一家そろってよく車で出かけたときのことを次のように回想する。「ウォーチェスターシャーシアにある小さなコテージの前に停まっているのを思い出した。ペンキの色や陽にあたって輝いているメタルを眺めながら、とても誇らしく思ったものだ」(261)。しかし、その記憶が車内でおもちゃの兵隊で遊ぶ場面に

およぶと、ライダーは母親から車のドアの開閉音がうるさいと、「生皮を剥ぐ(“skin me alive.”)」(261)と言われたことを思い出す。その後、ライダーは、車で遊ぶときには、母親に気をつかうようになったと次のように語る。

[T]his threat had been issued at a point when a door was actually ajar, leaving me in a quandary as to whether I should leave it open [...] or whether I should risk shutting it as quietly as possible. This dilemma would torment me throughout the remainder of my time playing with the car, thoroughly poisoning my enjoyment. (262)

「生皮を剥ぐ」という母親の言葉は、幼いライダーにとっては辛辣な記憶となって残っているのが分かる。ライダーにとって楽しかった家族との車での思い出は、クモの巣がかかった車が象徴するように、長年思い出すことがなかった、触れたくないものとなっているのが示される。つまり、家族の思い出が希薄なライダーが自らの家族を大切に思えないのは、因果なものとも捉えることができるだろう。

先述の通り、ライダーの未来の不安を具現化したのがプロツキーとされている。そのほかに Barry Lewis は、“Brodsky is also a kind of Captain Ahab, appearing in the novel at a late stage (Chapter 22) after much rumour and anticipation.” (113) と述べている。ルイスがプロツキーのことを *Moby Dick* の主人公のキャプテン・エイハブのようでもであると述べるのは、キャプテンが片足を失ったことと白鯨を捕まえそこねたことが、プロツキーが片足を失い、妻のミス・コリンズ (Miss Collins) を捕まえそこねることに類似するからであろう。プロツキーは、ミス・コリンズに逃げられており、復縁を何度も迫るが断られ、二人の関係は崩壊している。ライダーのどのような不安が、プロツキーにあらわれているのか考察してみたい。

ライダーは現在、ピアニストとして世界を飛び回っており、家族はそれを止められずにいる。ピアニストとして世界を巡り、賞賛を受けたいという欲求は、シュテファンによって体現されるように、才能がないと両親から「誤解」されたまま見放されたときに受けた心の「傷」を癒すことに動機づけられていると思われる。ライダーは、舞台上で人々の称賛を浴び、

注目されることで両親を認めさせたかったのかもしれない。しかし、世界ツアーに出るためには、音楽家として創作し続けなくてはならない。ライダーは、音楽家としての心境を、ボリスに次のように告白する。「毎年、旅ばかりで、そろそろうんざりしてきて、たぶん少し怠け心も出てしまっただけ。でもたいていは、そんなときに限って、それはやってくるんだよ。だから見逃してしまうんだよ。それから一生、行かなかったことを悔いることになる」(218)。ライダーがいう「それ」は、なにを指すのか具体的には語られない。しかし、音楽家として「怠け心を出してはいけない」という、ライダーのこの言葉の裏には、活動を止めることはできないという強迫観念があらわれているといえるだろう。創作活動をやめ、酒浸りとなり、妻に逃げられた老人がプロツキーである。つまり、プロツキーのようになってしまうことが、ライダーの恐れる未来の姿と捉えることができ、これまでも多くの研究者がそう論じてきた。

プロツキーがはじめて物語に登場するのは、プロツキーの亡くなった犬に哀悼をささげるパーティ会場である。このとき、ライダーは、プロツキーの姿を見て、次のように述べる。「やはり彼は、全体的に妙な角度に傾いている」(140)。ライダーは、以前にもプロツキーを遠くから見たとき、左に傾いていると感想を述べている。これは、はっきりとは語られないが、プロツキーが義足を付けているためだと考えられる。プロツキーは、子どもの頃に左足をなくしている。それは、次のように語られる。

私が子どもの頃だったと思う。もう随分と昔のことだ。はっきりと思えないよ。(中略) 私の人生は、ずっとそんな感じだよ、ライダーくん。片足がなかった感じだ。(中略) もう全く気にもしなくなっていたよ。傷は昔ながらの友達みたいになっているというか。もちろん、たまに煩わしくなることもあるよ。でも、長いこと付き合ってきたからね。確か子どもの時のことだったと思う。鉄道事故だったかな (464)。

プロツキーは、子どものときに鉄道事故で片足を失ったと述べている。しかし、物語の後半で、プロツキーは自転車に乗っているときに事故に遭い、そこに偶然居合わせた医者へのこざりて左足を切断されてしまう。し

かも、その医者、義足と気づかずに足を切断したとプロツキーは語っている（“That fool of a doctor, he didn’t realize. I was all caught in that bicycle, but it was just the artificial leg, the one that was trapped.”）(464)。なぜ、左足の「切断」は繰り返し言及されるのか。さらに、プロツキーは、足を切断したにもかかわらず、オーケストラの指揮を遂行するため「木曜の夕べ」の壇上に、アイロン台を松葉杖の代わりにして姿をあらわすのである。ライダーの未来の不安を具現化したのがプロツキーであると考え、プロツキーの足の「切断」にはなにか意味があると考えるもおかしくないだろう。

「木曜の夕べ」の演奏が始まると、最初は観客もプロツキーの指揮に圧倒される。しかし、それは長くは続かない。プロツキーの音楽の解釈のために、まず楽器演奏者の間に不穏な空気が流れはじめる。それは観客にも伝播し、会場が騒然となる。やがて、アイロン台が開いていき、バランスを崩したプロツキーは舞台上で転倒してしまい、演奏はすべて中断され、ライダーがピアノを弾くことはない。プロツキーが繰り返し痛みをうったえる「傷」は、これまでにライダーが公私にわたって負ってきた「傷」とも捉えられるだろう。また、繰り返される左足の「切断」は、ピアニストとして、世界を巡ることをライダー自身が止められないために、物理的に「中断」せざるを得ない状態に陥りたいという、ライダーが自らの願望を舞台上に投影させたものと考えられないだろうか。アイロン台が開いて転倒するという一見、コミカルでもあり、滑稽で目を覆いたくなるプロツキーの失態は、実は、舞台上で取り返しのつかない失敗をして、すべてを破壊、中断したいと願う、ライダーの深層心理を具現化したものではないだろうか。つまり、プロツキーは、ライダーの未来の「不安」を投影した姿ではなく、ライダーの「願望」のあらわれと考えられるのである。

4. おわりに

本稿において、『充たされざる者』の二組の親子に生じる「誤解」とプロツキーの左足の「切断」に焦点をあて、考察を試みた。現実において、親子の間で「誤解」が生じ、関係がこじれることは多々ある。しかし、本小説が示したかったのは、そのこじれた関係の修復を試みずに放置している

と、時が経つほどに溝は深まり、死の床においても会話ができないほどのトラウマとなってしまうということである。また、親との間に生じた「誤解」は、子のなかでトラウマとなって残るわけだが、その「傷」は結果的にライダーにとっては、音楽家として精進する「動機」を与えたと思われる。ライダーが逃したくないとボリスに語る「機会」あるいは、「それ」とは、両親との間の「誤解」を解くことができる「機会」なのだろう。ライダーは、旅を続けていれば、いつか両親と再会し、観客から喝さいを浴びる姿を見せることで、認めてもらえると考えていたのかもしれない。しかし、小説中には語られないが、ライダーの両親が「木曜の夕べ」に姿をあらわさないのは、実は、両親はすでに亡くなっているからなのではないか。ライダーは、両親の死を受け容れておらず、そのことに触れたくないために具体的な言及を避けているとも捉えられるだろう。従って、両親との関係を修復する「機会」はもはや無くなっている可能性がある。それにもかかわらず、ライダーが「機会」を求めて旅を続けるのは芸術家ゆえ、なのかもしれない。また、プロツキーの左足の「切断」も一見、グロテスクであり、「木曜の夕べ」での失態は、音楽家としてあるまじき過失と捉えられるが、実はそうではなかったと思われる。プロツキーの舞台は、ライダーの深層にある「破壊衝動」のあらわれなのである。ライダーがどんなに心に「傷」を抱えていようと、両親との和解の「機会」はもはやないと分かっているように、音楽家としての旅を止めることなどできないのである。それを裏付けるように、小説の終盤には、涙を見せながらも家族と離別し、次のリサイタルのために旅立つライダーが描かれている。ライダーは、旅を続けるのが苦しいのではなく、苦しいから旅を続けるのである。ライダーは、ピアノを弾くことでしか、慰みを得ることができないことを知っているのだ。

注

1. テキストは Kazuo Ishiguro, *The Unconsoled* (London: Faber and Faber, 1995) を使用し、引用頁数は同書からのものである。また訳文は拙訳だが、カズオ・イシグロ『充たされざる者』(古賀林幸訳、早川書房、2007) を参考にした。
2. Gary Adelman, "Doubles on the Rocks: Ishiguro's *The Unconsoled*," *Critique* 42, 2 (Research Library, 2001), p.167.

3. Barry Lewis, *Kazuo Ishiguro* (Manchester and New York: Manchester University Press, 2000), p.111.
4. 単語そのものは「解釈違い」、「不和」、「意見の相違」などの意味があるが、本稿においては、小説中の文脈から「誤解」と訳して論じる。
5. ブロツキーは、森の中を自転車で走行中に事故に合い、左足を切断することになる。正確には幼いころに鉄道事故で足を失っているため、義足の切断ということになる。
6. シュテファンは、“[T]hey first realized how short of the mark I was. They listened very carefully to my playing—it was probably the first time they *really* listened—and they realized I’d only humiliate myself and the family by entering[the program].” (74) とライダーに打ち明けている。

参考文献

- Adelman, Gary. “Doubles on the Rocks: Ishiguro’s *The Unconsoled*.” *Critique*: Winter, 42, Research Library 2: 2001. 166-179.
- Flor, Carlos Villar. “Unreliable Selves in an Unreliable World: The Multiple Projections of the Hero in Kazuo Ishiguro’s *The Unconsoled*.” *Journal of English Studies* 2 Universidad de La Rioja, 2000. 159-169.
- Jaggi, Maya. “Kazuo Ishiguro with Maya Jaggi.” *Conversations with Kazuo Ishiguro*. Ed. Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong. Mississippi: UP of Mississippi, 2008. 110-119.
- Lewis, Barry. *Kazuo Ishiguro*. Manchester and New York: Manchester UP, 2000.
- Steinberg, Sybil. “Kazuo Ishiguro: A Book About Our World.” *Publisher Weekly*. Sep. 18, 1995. 105-06.
- Wang, Ching-chih. *Homeless Strangers in the Novels of Kazuo Ishiguro: Floating Characters in a Floating World*. New York: The Edwin Mellen P, 2008.

(明治大学非常勤)
rhea@ameaca.net